

王の闇

沢木耕太郎



王の闇

沢木耕太郎

文藝春秋

著者略歴

- 1947年 東京に生まれる。
 1970年 横浜国立大学経済学部卒業。
 1973年 「若き実力者たち」(文藝春秋刊)
 1976年 「敗れざる者たち」(文藝春秋刊)
 1977年 「人の砂漠」(新潮社刊)
 1978年 「テロルの決算」(文藝春秋刊・第10回大宅壮一ノンフィクション賞受賞)
 1979年 「地の漂流者たち」(文春文庫)
 1981年 「一瞬の夏」(新潮社刊・第1回新田次郎文学賞受賞)
 1982年 「路上の視野」(文藝春秋刊)
 1984年 「パーボンストリート」(新潮社刊・第1回講談社エッセイ賞受賞)
 1986年 「馬車は走る」(文藝春秋刊)、「深夜特急」(新潮社刊)
 1988年 「キャバその青春」「キャバその死」「ロバート・キャバ写真集」(訳書・文藝春秋刊)

王の闇

一九八九年九月一日 第一刷
 一九八九年九月二五日 第三刷

* 定価はカバーに表示してあります

著者 沢木耕太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-1-23
 電話 東京 (二六五) 一一二一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
 製本所 加藤製本

* 万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

ジム

5

普通
の一日

53

コホーネスへ
胆っ玉

95

ガリヴァー
漂流

139

王であれ、
道化であれ

197

あとがき

250

装幀 平野甲賀
写真 著者

王
の
闇

「わたしにあって、あなたにないもの」
道化が王に謎をかけた。

B・セルバンテス

ジ

ム

それは壮絶な事故だった。

時速百キロを超える猛スピードで疾走してきた白いスポーツ・カーが、高速道路上で十一トン積み的大型トラックに激突、スポーツ・カーは大破し運転者は即死した。昭和四十八年一月二十五日、冬にしては奇妙なほど生暖かったその日、プロボクサー大場政夫が死んだ。

プロボクシング世界フライ級チャンピオンの大場政夫選手が二十五日昼前、東京都新宿区の首都高速道路で交通事故を起こして死んだ。二日に防衛戦を行なって、ダウンを喫しながらもねばり強く挽回、チャンピオンの座を守ったばかりだった。(毎日新聞「一月二十五日夕刊」)

午前十一時二十分を少し過ぎた頃であつた。一台の大型トラックの運転手が川越での仕事を終え、会社へ戻るため池袋から首都高速五号線にのつた。会社は横浜の鶴見区にあつた。ところが、日本橋方面からの下り車線が滞りなく滑らかに流れているのに、池袋から日本橋に向かう上りはかなり渋滞していた。数メートル走つては止まり、しばらくするとまたほんの少し進むといった状態だつた。しかし、やがてそのわずかな流れすらも、江戸川橋付近の通称「大曲カーブ」で止まってしまった。苛立つても前に進めるわけではない。運転手は諦めるような気持でサイド・ブレーキを強く引いた。

その時である。下り車線から、高さ二十五センチ、幅八十センチの中央分離帯を飛び越え、凄まじいスピードで純白の車が突っ込んできた。前後を渋滞中の車ではさまれているトラックに避けられるはずがなかった。その白い車はトラックの右肩に激突、大破した。トラックは前部に傷をつくただけだったが、さしもの十一トン積みもその衝撃で一メートルほど後に押し戻されてしまった。

トラックの運転手に怪我はなかった。運転手はすぐ運転席から飛び降りると、白い車に駆け寄つた。車はロング・ノーズの外国製スポーツ・カーで運転席が左側についていた。トラックの右肩に衝突したのは、その左側だつた。トラックの運転手にはスポーツ・カーの運転者が死んでいるのか生きているのかがよくわからなかった。スポーツ・カーの内部をのぞきこむと、白いスーツを真紅の血で染めた男がひとり、運転席で斜めになつていた。運転手は、とっさに、動かさずそのままにしておく方がよいと判断した。トラックから毛布を取り出してくるとその男の体の上

にかけ、近くの非常用電話で警察に通報した。

警視庁の高速道路交通警察隊のパトロール・カーが十分もたたぬうちに駆けつけたが、男はすでに死んでいたも同然の状態だった。やがて到着した救急車で病院に運ぶため、救急隊員が運転席から抱え出そうとしたが、その瞬間、男の頭は首からガクツ、ガクツ、と崩れるよう揺れた。

しかし、まだ男の命の「かけら」のようなものは残っていた。救急隊は男を大塚の日通東京病院に運び込もうとした。だが、午前十一時五十五分、その命の最後の「かけら」も、救急車の中で消えた。

男が救急車で連れ去られた後も交通警察隊の手で検証は続けられた。スリップした箇所はおよそ四十メートルにわたって車輪の跡がついていた。しかし、右側の跡はほとんどついていない。つまり、男はこの左廻りの「大曲カーブ」を百数十キロのスピードで廻ろうとし、ハンドルを切ったが切り過ぎてしまったのだ。左に傾き、右の車輪が浮いてしまったため、今度は慌ててハンドルを右に切った。ところがその切り方が余りに急激すぎたためバランスを大きく崩し、中央分離帯を越え、反対車線に飛び出してしまったのだ。

車は、シボレー・コルベット・ステイングレイ・クーペ、という正式名を持つ超高級車だった。排気量五千七百三十三、馬力百九十の大型エンジンを搭載している。値段は五百五十万円くらいするといわれ、日本でも三台か四台しか走っていない新型だった。ステイングレイは赤鱗あかえいの意であり、この車はエイのごとく流麗な、重心の低い、だから高速安定性に富んでいるはずの型であった。

《現場は半径百メートルほどのゆるやかな左カーブ、傾斜角度は約十度、さほど難しい場所ではない。安全速度は六十キロだが、普通程度の技術を持っていれば、百キロはおろか百数十キロを出していても問題なく曲り切れるはずである。現に「大曲カーブ」での死亡事故は開通以来ひとつもない。結局、事故原因は運転技術の未熟さという一点につきる》

これが交通警察隊の統一見解といってよかった。

金持ちのドラ息子が新しいスポーツ・カーを駆って無謀運転をしたあげく、自爆するようにして死んでいった。この事故はただそれだけの事件にすぎないと思われた。

しかし、男の服のポケットに入っていた免許証を調べた時、隊員たちは驚いた。そこに大場政夫という名が記されてあったからだ。そういえば、いくらか血に汚れてはいるが、白いスーツのその男の顔は、確かにボクサーの大場政夫によく似ていた。隊員たちは大場の顔を知っていた。それもある意味では当然のことだったかもしれない。事故の三週間前、大場はタイのチャチャイ・チオノイと、実に劇的な世界タイトル・マッチを行なっていたからだ。倒し、倒されの白熱戦は、テレビで放映され、久し振りに日本中を沸かせていた。

事故を起こした男が世界チャンピオンの大場政夫らしいということは、無線ですぐに報告された。やがてシボレー・コルベットについていたナンバー「練馬33 3580」から、その車は間違いないボクサー大場政夫が太平洋自動車東京本社で五百二十六万円を出して購入したものであることが確認された。手渡されたのは、事故のわずか十二日前にすぎなかった。

警視庁の発表によれば、直接の死因は頭蓋底骨折と脳挫傷だった。胸をハンドルで強打したら

しく、左肋骨の一から八、右肋骨の一から三までの計十一本の肋骨が完全に折れていた。肺も破裂していた。脳の損傷も激しく、その中身が耳、鼻、口まで溢れ、一部は体外にも流れ出していた。しかし、これほどの全身打撲を受けながら、不思議なことに、ボクサーとしては端正すぎるほど端正な大場の顔にはまったくといってよいほど傷がついていなかった。

その日の夕刊には、たとえば次のような見出しで大場の死が大きく報じられた。

『大場、首都高速に死す』

2

……あの子の事故を知らされた時、わたしは「そんなことはありえない」と小さく叫んでしまった。警察からの電話だったが、信じられなかった。そんなことが起こるはずがないと思えた。

大場が車を持とうとした時、わたしは誰よりも強く反対した。自分で車を運転し、人でもはねたらどうするつもりなのか。その瞬間にボクサーとしての生命は絶たれてしまうにちがいない。わたしはそれを怖れた。その心配は、世界チャンピオンのマネージャーとしての計算からというより、十五の時から手塩にかけた少年への愛情からだだったとわたしは思う。いま考えれば奇妙なことだが、大場自身が事故で傷つくなどとは思ってもみなかった。ただひたすらあの子が人を傷つけることが恐かった。

「路地から飛び出してきた子供をちょっとでもひっかけたら、あなたはそれで終わりなのよ」

そう言いつづけていた。

しかし、世界チャンピオンになり、二度の防衛に成功したあとで、大場は一台の自動車を買ってしまった。わたしは反対しつづけた。わたしとあの子との間には何ひとつ揉め事がなかった。マネージャーと選手とにありがちな金銭上のトラブルもなかったし、選手としての日常生活に対する細かい指示にも文句を言わず従ってくれていた。わたしの言うことを、大場は実に素直にきいてくれていた。ただひとつ、車のことだけが二人の争いの種だった。しかし、わたしの心のどこかには「仕方がない」という諦めに似た気持があった。「あの子には車を運転することくらいしか楽しみがないのだから」と。

酒も煙草も許されず、食べたい盛りに好きな物おいしい物を食べることも許されない。同じ年頃の若者たちに許されている、ほとんどすべての欲望を抑えつけなくてはならない。女を近づけさせないため、タイトル・マッチが終わると会長と共に外国に旅行させる。帰ってくると次の試合に向かつてのトレーニングを始めさせる。それなのに、年齢に不相応な大金だけは持っているのだ。何かひとつくらい息を抜くためのものが欲しいのだろう。大場を不憫に思う気持が黙認という形をとらせてしまった。しかし、それがやはり過ちだったのだろうか。

わたしのその気持を察していたのか、大場はわたしの前で車の話題を口にするのがなかった。ジムの下にある駐車場にも入れず、かなり離れた路上に止めておくほどわたしに気をつかってくれた。

やがて、ポンティアックからシボレーに買い換えた。ジムの若い練習生たちが「凄い、凄い」

と騒いでいる。日本に数台しかない車だという話につられてわたしも少し見物してみたくなり、駐車している場所にそつと行ってみた。純白の鼻の長い車体に眼を奪われていると、不意に大場が姿を現わした。きつとわたしは悪戯が見つかった時の子供のようなひどい慌て方をしたにちがいない。しかし、大場はわたしが見にきてくれたということがとても嬉しい様子だった。熱心に車の性能を説明し、ヘッド・ライトがスイッチひとつでボディの内部に格納される仕組みなどを実際に試して見せてくれた。ひとつひとつの仕草から誇らしく昂揚した気分が伝わってくるようだった。その車が、二十三歳のチャンピオンの虚栄心を、ささやかながら満足させるものであることは確かかなうだった。ボクシングを除いたら、あの子にいったいどんな誇りがあつたろう。もしかしたらほんとうに車だけだったのかもしれない。

「危いから気をつけなさいよ」

わたしが注意すると、

「事故を起こすような神経でボクシングなんかできないよ」

と言って笑った。確かに大場の言う通りだとわたしも思った。常人以上の神経がないかぎり、相手に打たせず相手を打つなどということはできるわけがない。「でも気をつけてね」とわたしは言った。それが、二人で車について楽しく話した最初で最後の機会になった。その日がちょうど事故の前日だったからだ。

事故を知らされて「そんなことはありえない」と叫んだのは、そうあってほしくないという願いと同じくらいに、抜群の運動神経を持っているあの子が、自分から事故を起こすはずがないと

いう、大場への信仰のようなものがあつたからにちがいない。

その日は正午過ぎから『週刊平凡』とのインタヴューが予定されていた。午前十一時頃に「お姉さんの好きなケーキを買って行くからお茶でもいれて待っててくれない」という電話が入っていた。もうすぐ来る頃だと待っているところに、警察からの知らせが飛び込んできた。

ジムを飛び出し、急いで大塚の日通東京病院に向かっている時でさえ、あの子が事故を起こし、死んでしまったなどということは、どうしても信じられなかった。あの子がいつもわたしをそう呼んでいるように「お姉さん」と言つて、病院の廊下を走ってくるのではないだろうか。「驚かせてすみません」と言いながら姿を現わすのではないか……。

しかし、病院に着き、冷たい地下の階段を降りて行かなければならなかった時、あの子が死んでしまったことをどうしても認めなければいけない瞬間が来てしまったのだと悟った。

大場の遺体はそのまま帝拳ジムに運んで帰った。リングの前に遺体を安置し、仮通夜を行なった。柩に入ったあの子の顔は、傷ひとつない、ほんとうに綺麗な表情をしていた。検証をなさった係の方によれば、壮烈な事故だったにもかかわらず大場の顔は「恐怖を見た顔ではない」とのことだった。

祭壇の飾りつけなどの細かいことは、葬儀社の人たちの手によって次々と進められていった。わたしは茫然としていたが、葬儀社の人に「何かいい写真はありませんか」と言われて、あつと声を立てそうになった。一枚の不吉な写真のことを思い出したのだ。